



## ヤクタネゴヨウと生物多様性の保全について

屋久島には、屋久島と種子島だけにしかないゴヨウマツの仲間である省レッドデータブック絶滅危惧IB類にランクされた、ヤクタネゴヨウが自生しています。ヤクタネゴヨウの仲間は、日本本土に目を移せば、九州、四国、本州に成育しているゴヨウマツ（東北ではヒメコマツ）と言います。別名キタゴヨウとし、同種かどちらかを変種として区別することもありますが、チョウセンゴヨウ、本州の高山帯に成育するハイマツ（北海道にエンハイマツ）、ハイマツとキタゴヨウの雑種ハッコウダゴヨウなどいくつかの近縁種があります。東北地方のヒメコマツの写真を載せておきます。こんなに種類があるのは、日本の生物種の多様性が高いことを意味しています。それらの区別が専門家にお願いとしまして、ヤクタネゴヨウに少し触れておきます。



ヒメコマツ自然群落(秋田)と球果

(中国南部のものをカザンマツという)に近い仲間とされ、日本国内の他のゴヨウマツとは、分布域で一線を画していること、自生地の標高は概ね二百メートルから八百メートルの範囲内にあり、他のゴヨウマツが冷温帯や亜寒帯等に多く分布しているのと違い、暖温帯の照葉樹林域とほぼ重なる分布域にあります。

ゴヨウマツ類は、一般に乾燥した場所で風が良く当たる土壌の薄いやせ尾根に分布している点でその成育特性が似ています。また、日本本土のゴヨウマツ類は概して個体数が多く、比較的分布域が広いこと等から種の存続の危険性は少ないといえるでしょう。一方、ヤクタネゴヨウは、種の存続に次のようないくつかの大きな問題があります。屋久島の限られた自生地の中に約二千本、種子島には分散して約三百本程度と個体数が極めて少ないことから、他家受粉の機会が少なく、結果として種子がうまく発芽成長しないのです。このため、後継樹がほとんどありません。加えて、



ヤクタネゴヨウ自然群落(瀬切川流域)と球果

過去にマツ材線虫病の被害を受けてさらに個体数が減少しました。最近ではシカの食害や酸性雨の影響も心配されています。

このような背景から、林野庁では、平成十五年度に屋久島森林管理署管内の鍋山国有林内に遺伝子保存を図るためにヤクタネゴヨウの見本林・採種林を設置しました。また、屋久島にはヤクタネゴヨウ調査隊(NGO団体)があり、これまで得られた基礎的情報の多くは森林総研等の方々とともに、地道な分布状況等の調査活動が永年行われてきた成果です。

採種林は、まだ幼令木のため、雑草の勢いに負けたり、乾燥害やマツノミドリハバチなど害虫の被害(写真)を受けたりします。平成二十年から取り組まれている「九州森林の日」には、毎年この採種林において、行政関係者をはじめ、一般市民やNPO、企業ボランティアなど幅広い国民参加を募り、ヤクタネゴヨウの保全のため、下刈り作業、シカ保護柵のメンテナンスなどを行ってきました。今年度も同様の作業を行うこととしています。が、植栽後十年近くを経過して、枯損、消滅したものが増えてきました。作業の一部は欠株の箇所を補植をするため、植樹作業を盛り込むこととしています。今回提供いただく苗木はかつて屋久島から穂木を採集し、森林総合研究所林木育种センター九州育種場で育てられてきた苗木です。生育地以外で種の存続のために増殖育成することを生息域外保全と言いますが、現在の採種林も生息域の外で育てられた苗木が、現在に至っているので

## 採種林のボランティア作業とハバチ被害



す。今回、里帰り苗による補植を行うことができれば、大変意義のあることと言えるでしょう。

さて、ここで生物多様性の保全という点について、少しお話をしてみます。何故、このように絶滅のおそれがある一つの種について、色いろ対策を取って保全しなければならぬのでしょうか。生物多様性は、あらゆる生物が色々の形で恩恵を受けており、生存の基盤となっているのです。絶滅危惧種の保全は、生物多様性の保全であり、人類を含めあらゆる生物が共生している自然環境を守るということに繋がることだからなのです。

身近にある希少種ヤクタネゴヨウを守るため、自分も生物多様性の保全に貢献してみたいとお考えの方があれば、是非この機会に現地作業への参加をお願いします。

なお、作業の準備を現在、鋭意進めているところです。皆様の参加のご案内は、改めて行うこととしていきますので、もうしばらくお待ち下さい。

## 番外編

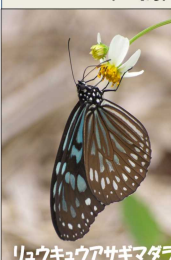
## 屋久島の野蝶

《迷蝶って何?》  
海に近い、森に囲まれた風の穏やかな道脇で、見慣れぬ南国風の蝶を見かけたら・・・それは迷蝶かもしれません。

「迷蝶」とは、強い季節風や熱帯低気圧によって、本来の生息地とは異なる地域に運ばれ、一時的に住み着く蝶達のことを言います。屋久島を含む南西諸島は、台風が通過することが多いため、こうした迷蝶が観察されることは珍しくありません。また、迷蝶といえども条件が揃えばその場所で繁殖し、次の世代が発生します。長距離を移動した個体は、ハネが破けていたり鱗粉が落ちていたりすることが多いので、傷のない新鮮な個体を見つけたら、そこで羽化した可能性が高いと考えられます。

なお、蝶と同様に鳥についても、台風の後は、思わぬ珍種が発見されることが多々あります。

## 屋久島で観察された迷蝶(一例)



リュウキュウアサギマダラ



リュウキュウムラサキ



カバマダラ

※一部の蝶は、完全に定着したとする見解もある。